

ハマサンゴの上に咲くように広がるイバラカンザシ(ゴカイのしっぽ) ー沖繩・阿嘉島沖



慶良間の海は特別だ。沖繩本島の西約40°に位置し、渡嘉敷(とかしき)、座間味(ざまみ)、阿嘉(あか)など大小15の島で構成される慶良間諸島。島



阿嘉島

々に囲まれた内海には、さまざまなサンゴが咲き乱れるように広がっている。

日本国内のサンゴ研究の拠点である阿嘉島臨海研究所の調査によると、狭いリーフ内に240種以上のサンゴが群生している。最近の研究では慶良間諸島のサンゴが沖繩本島沿岸に広がるリーフにサンゴの卵や幼生を供給し続けていることもわかってきた。

慶良間の海はサンゴの故郷なのだ。

240種が群生サンゴの故郷

2面に続く

海のオアシス

1面から続く

サンゴの危機が叫ばれるなか、守るだけではなくサンゴの増殖に取り組み研究機関がある。慶良間諸島・阿嘉島の阿嘉島臨海研究所がそうだ。

サンゴは無性生殖と有性生殖の二種類の増殖方法で増殖する。無性生殖はサンゴの最小構成単位のポリプが分裂する。有性生殖は産卵だ。年に一度、サンゴが海中で産卵し受精。二日程度で「プラヌラ幼生」になり、海を漂い、岩礁に取り付き、ポリプに変態する。だが、自然状態では受精率が悪く、プラヌラ幼生は魚に食べられたり、岩礁に取り付けなかったりで生存率は低い。

阿嘉島臨海研究所は有性生殖の生存率を高める研究に取り組んでいる。サンゴの卵を採取、人工的に受精させ、数日間育て幼生にして、プレートに着生させる実験だ。

研究といっても実際は肉体的労働がほとんどを占める。サンゴの産卵は五〜九月の大潮の夜。翌朝早く潮目に集まったサンゴ



サンゴ増殖ある研究所の試み

の卵を採取するために、船を出し、柄杓で卵をすくう。また、大潮の前日に海に潜り、産卵しそうなサンゴを見極め、周囲に採取用のフィルターを設置す

る。採った卵も受精しなかったものは腐るため、こまめに除去しなければならぬ。研究所の夏はこの作業でほとんど忙殺される。それでも「ナガレハナサンゴの上で共生するニセアカホシカクレエビ」程度のプラヌラ幼生が細かく動き回るのを見ると愛情がわきますよ」と研究員の谷口洋基さん(三三)。

研究所は、かなりの確率でプラヌラ幼生をプレートに着生させる技術を確立。プレートを阿嘉島のリーフに沈め、数ヶ月程度のサンゴの「種苗」の生産にも成功した。種苗を生育に適した場所に移植すれば、サンゴは自分で根付くはずだという。

谷口さんは「サンゴの種苗生産はサンゴ礁再生に大きな意味をもつはず」と期待をかける。海水温の上昇によるサンゴの白化現象のような大規模な破壊には対応できないが、サンゴを食べるオニヒトデの被害などには、天敵を駆除したあとのサンゴ復活に一役買える。実際に他の研究機関と協力してサンゴ復活プロジェクトも動き出している。

慶良間諸島に住む人々は、この豊かな海を離れては生きていけない。豊かな海を守るにはサンゴを守らなければならぬ。サンゴ復活プロジェクトはその第一歩だ。

文 堀 洋
写真 頼光和弘